

武蔵野日曜聖書講筵

恩恵

――詩篇第30篇――

1976年11月14日

小池辰雄

新約のキリストの光でつかむ 天界に引き揚げる 神の救いは無条件絶対的 直ちに即の現実
聖者と罪びとの二重構造 神の怒りと恵み 十字架と聖霊 人を荷なう力は聖霊 無者即無限
無量者 人間の最大の関心事は宗教 肉体が霊体に化する 神の根源語 愛とは人を荷なうこ
と 祈り

【詩篇30】（私訳）

ダビデの絃歌、献殿の歌

1 ヤーヴェーよ、汝を崇めまつる。汝我れを引き揚げ、
わがあだ 我仇の我につきて喜ぶことなからしめ給いければ。

2 ヤーヴェーわが神よ、我は「ただ」汝に叫ばわれり、
汝はそのとき我を癒し給えり。

3 ヤーヴェーよ、汝はわが魂を冥府より取りあげ、
おくつき 我を生かして墳墓にわがくだるをとどめ給えり。

4 ヤーヴェーを奏で謳えよ、その聖徒らよ！
かな うた 其の聖潔を憶えて感謝せよ！

5 それ聖怒りは束の間にして聖恵みは生涯「に亘り」、
ゆうべ なみだ 夕に泣涕きたり宿るとも晨には歡呼「来らん」！

6 然るに我れは言えりわが安泰けかりしとき、
やす 我はいつまでも動かされじと。

7 ヤーヴェー、汝聖恵みをもて我山に力を立たせ給いしが、
わが 汝が聖顔を隠し給えば、我は戦き惑いて在りき。

8 汝ヤーヴェーを我は呼ぶなり、
わが主にご我は切に願うなり。

9 われ墓穴に降りなば、わが血に何の益あらん！
まこと 塵は汝に感謝を致し汝の信実を述べつたえんや！

10 ヤーヴェーよ、聴きあげ給え、我を憐み給えかし。
ヤーヴェーよ、我に助けとなり給え。



11 汝はわが哀願をばわがために踊躍にうち変え、
わが麁布を解きて歡喜を我に帯びし給えり。

12 それ故に榮えは汝を謳いて黙すことなからん。

ヤーヴェエーわが神よ、いつまでも我は汝に感謝せん。

●新約のキリストの光でつかむ

詩篇第30、31、32、33篇の4篇は、あるひとつのグループと言いますが、もうこれで福音が全部入っているような感じがする4篇です。私の訳で読みます。

ダビデの絃歌、献殿の歌

「献殿の歌」という。教会堂を建てると献堂式をします。神殿を設けてその時に歌うような歌。「絃歌」と私は訳したけれど、「プサルモス」というギリシア語は絃楽伴奏の歌ということ。ダビデ原作としてあるが、歴史的には、学問的には分かりません。

1 ヤーヴェエーよ、汝を崇めまつる。汝我れを引き揚げ、
我仇の我につきて喜ぶことなからしめ給いければ。

ここは、

「なからしめ給いければ」

と、むしろ具体的な事実に基づいた言葉とした方がいいと思います。「引揚げ給え」ではない。

「引揚げ給うた」

なんだ、これは。過去なんです。

「引揚げ給うたので、私はあなたを崇めまつる」

ということ。

2 ヤーヴェエーわが神よ、我は「ただ」汝に叫ばわれり、

汝はそのとき我を癒し給えり。

なにか病気にかかっていたとみえます。

3 ヤーヴェエーよ、汝はわが魂を冥府より取りあげ、

我を生かして墳墓にわがくだるをとどめ給えり。

「陰府」とか「墓」とかヘブライ語の詩はよく対句で同じような事態を別な言葉でいう。

4 ヤーヴェエーを奏で謳えよ、その聖徒らよ！

その聖潔を憶えて感謝せよ！

5 それ聖怒りは束の間にして聖恵みは生涯「に亘り」、
夕に泣涕きたり宿るとも晨には歡呼「来らん」！

これは有名な句ですね。今の普通の訳では、

「その怒りはただつかのまで、その恵みはいのちのかぎり長いからである。

夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びがくる。」（口語訳）



「その怒りはただしばしにしてその恵みはいのちとともにながし。

夜はよもすがら泣きかなしむとも朝にはよろこびうたわん。」(文語訳)

と。昔の訳は非常に日本語としては素晴らしいですね。まあ、こういう訳し方でもいいですが、内容はそういうことです。一応、読んでおきますかね。

6 然るに我れは言えりわが安泰^{やす}けかりしとき、

我はいつまでも動かされじと。

7 ヤーヴェー、汝^み聖恵^みをもて我山^{わが}に力を立たせ給いしが、

汝^みが聖顔を隠し給えば、我^{おのの}は戦き惑いて在りき。

8 汝ヤーヴェーを我は呼ぶなり、

わが主にぞ我は切に願うなり。

9 われ墓穴に降りなば、わが血に何の益あらん！

塵は汝に感謝を致し汝の信実^{まこと}を述べつたえんや！

10 ヤーヴェーよ、聴きあげ給え、我を憐み給えかし。

ヤーヴェーよ、我に助けとなり給え。

11 汝はわが哀願^{なげき}をばわがために踊躍^{おどろ}にうち変え、

わが麁布^{あらたえ}を解きて歡喜^{よろこび}を我に帯びし給えり。

12 それ故に榮えは汝を謳^{うた}いて黙^{もだ}すことなからん。

ヤーヴェーわが神よ、いつまでも我は汝に感謝せん。

と。そういう詩であります。私たちが旧約の詩篇を読むときに、単に旧約の立場で読むのではなくて、新約のキリストの光でこれをつかみたいというわけです。もちろん、節を追って解釈をするわけではない。

●天界に引き揚げる

1 ヤーヴェーよ、汝^{あが}を崇めまつる。汝我れを引き揚げ、

我^{わが}仇^{あだ}の我につきて喜ぶことなからしめ給いければ。

「汝^{あが}を崇めまつる。汝我れを引き揚げ」

という言葉がありますが、

「神さまが引揚げていく」

と。まあ、仇のことはどうでもいい。旧約ではよく敵に対して意識して、

「やつつけてくれ」

だとか、何とかかんとかと祈ってますが、そういう祈りは新約のキリスト者としての祈りにはならないですから。

天界に引き揚げるということは即ち、相対的な現実から絶対的な現実へと引き揚げる。神さまに引き揚げられていく。即ち、



「汝らの国籍は天にあり」

とパウロは言いましたが、我々の本当の故里ふるさとは天界である。引き揚げるといふ空間的な言方ですけれども、霊的な天界に引き揚げられていく。

我々の旅は神に向かつての上昇カーブの旅でありまして、ちょうど山を登るようなわけで、山巔さんてんに向かつて昇って行くようなもの。そういう意味でこの「引き揚げる」という言葉は非常に明るい力強い言葉であります。ゲートルの有名な『ファウスト』の最後の言葉も、

「我々を引きあげて往く」(zieht uns hinan)

という言葉で終わっています。

² ヤーヴェーわが神よ、我は「ただ」汝に叫よばわれり、

汝はそのとき我を癒いやし給えり。

「癒す」という言葉が使つてあるから、病気であると思います。ドイツ語のルターも、

「健やかにしてください」(machtest Du mich gesund)

と訳している。また、ドイツ語の「ハイレン」(heilen)という――英語の「ヒール」(heal)ですね――そういうように訳してもいい言葉です。

私たちは心も身体も病んでいる。

「万人は病人である」

と言つてもいい――あまりいい言葉ではないけれども――それを私は

「破れ」

という言葉で言っているわけです。私たちの現実には破れの現実です。

「救う」という言葉はドイツ語では「ハイレン」(heilen)といいます。医術、医学のことを「ハイルクンデ」(Heilkunde)という。「ハイレン」「救う」という言葉は、心を健やかにし、身体を健やかにする。身心どっちにもかかってくる。

キリストの救いは即ち、私たちの心の救い、魂の救いと身体の救いと両方にかかっています。全存在が完全に救われるというのが救いで、身体に関するなら「癒し」になりますし、魂のことならば魂の「救い」ということになる。特に救いはそっちの方面に強く関わるわけです。その意味でここに

「叫よばわつたらば癒してください」

と。神さまがむしろ呼んでおられる。こちら側は「叫よばわる」、叫ぶんですけれども。神さまの方でむしろ先に呼んでいる。神の声をむしろ先に聴かなくてはいかんわけです。

我々が神に対して呼ばわることができるといふことは、神さまからの呼びかけがあるからです。神に向かつて呼ばわらないで、人に向かつて呼ばわっているうちはダメです、人に助けを求めているうちは。それはまあ、ある次元においてはそれも自然ですけれども。本源的には、いちばん本質的には神に向かつて叫ぶ。

祈りはある意味において叫びなんです。全存在で神に自分をぶちまける。それが祈りで



すから。神さまの方ではそれが全的である。

●神の救いは無条件絶対的

全的とは、神さまを全的に信ずること。

「信ずる、神に依り頼む」

とは、

「こういう場合ならどうである」

とか、こちらの何かによつて神さまの側が判断されるようなことではダメなので、神さまの方はもう無条件。無条件に私たちを救おうとしておられる。身心共に無条件に救おうとしておられる。それに対するところの全的なあるがままの自分を投げ出す。

「全的」

とはそういうことですよ。何か「精神統一」ということではない。

「まだ私は精神が統一していませんから」

なんて、いつまでたつたつて統一はしない。現在の自分の状態そのままでもいい。そのままを投げ出すことが本当の叫びです。体裁も何もない。そこにはむしろ、そういう在り方に對しては、神・キリストは100%に臨んでくださる。

福音書を読まれると、すぐそのことに気がつく。キリストに立ち向かっている人たちが、自分の判断や自分の方を何かと思っている連中は、みんなダメなんです。けれども、あの桑の木によじ登つてキリストを求めていたあの取税人、そういったのがこの全的な呼ばわりと同じ態度です。そうすると、キリストはもうちゃんと先に見ておられて、

「私はお前のところへ行つて、今日は泊まるぞ」

なんてね。それで一家が救われてしまったでしょ。

そういう呼ばわりというものの、叫びというもの。何も大きな声を出すことが叫びではないので、汝に向かつて本当に全存在を叫びとして向かつていく。そうしたら神さまは100%にそれに応えてくださる。いつも神の方では全的なんですから。全的に、条件なんか考えておられない。

「こういう場合にはお前を救つてやろう」

なんていうのではない。救いの世界はそういつた無条件ですから。

「我を癒し給えり」

という。これで躓いては困るのは、

「それでは、自分は祈ったけれども癒されなかったから、祈りがどうだった」

とか、そういうような判断はしてはいかん。

「よろずのこと時あり」

という。神さまの方では時がある。その時に即刻、現象としても癒し給うか、あるいはも



つと後になるか、あるいは地上では癒えないかもしれない。

けれども、神さまの癒しというのは、もうひとつ新約の角度からいいますと、根源の現実においては、本当に投げ出した時には身心共に癒されているんです。身心共に救われている。これが信仰のいちばん大事なところなんです。御利益ではない。神の救いは無条件です、無条件、無条件絶対的。

こちらはあるがまま——どんな形をしたってかまやしない——そのまま向かっていくのが本当の叫びです。そうしたらば、神さまの方はこれが無条件に取り入れてくださる。それがどのようなにまん丸くなるかは、神さまの側の話で、こっちの知ったことではない。そういうようにして

「神を信ずる」

というのが本当の信です。

だから、根源現実においては、直ちにその救いの中に入っている。それがどのように現象するかは神さまの側の時がなさるので、こちらはそういうことは思わない。それがまことの信であると私は受けとっている。だから——「だから」といったらおかしいけれども——本当の力が来るんです。

「汝はそのとき我を癒し給えり」

と。だから、もしこれをいうなら、

「汝はそのとき、私を根底から癒してください」

と。そこに

「汝は根底から、根底において、根源現実において、癒してください」

と——そんなことを言葉に書く必要はないけれども——この

「癒し給えり」

の奥にその現実を、新約の角度から受けとっていただきたい。いわゆる御利益信仰ではない。しかし、それは現象することしばしばであります、正直。本当に力がきますから。

●直ちに即の現実

3 ヤーヴェーよ、汝はわが魂を冥府より取りあげ、

この「わが魂を」という言葉は「われを」と言ってもいい。

我を生かして墳墓にわがくだるをとどめ給えり。

冥府から取りあげ、墳墓にくだることをさせないで生かしてください。旧約では本当の復活の生命のことはまだ来てません。けれども、旧約のこの祈りで——旧約では「冥府」(シェオール)とか「墓」とかいう言葉はもちろん非常に暗い言葉です。そこにはもはや叫びもなければ、求めもなければ、もう絶望的な現実なんです——でも、それに対して神さまとの交わりが祈りの世界で強くなってくると、そういった現実を時々ぶち破っているよう



な言葉が出てくる。

「我を生かして」

という。

「我を、我が魂を取り上げ、我を生かして、冥府と墓に対して勝たしてくださいました」

と。ということは、新約的な救いに対して非常に預言的に近づいているというような言葉です。どうせ、私たちはいずれ墓に葬られるというようなことをみんな運命的には持っている。まあ、私は、もし墓石をつくるならば、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

というような句を書いておいてもらおうと思いますけれども。なにか墓というのは陰惨な感じを与えない方がいい。

「あの人のお墓に行くとき非常に明るくなった」

なんて（笑）。それはもはや墓が墓でなくて、この墓に勝っているわけです。

〔註：小池辰雄の墓碑には「PARADISO」と刻まれている〕

この詩篇の今読んでいる3節あたりが、

「我を生かして」

という。何といつても人間はいちばん根源的な、いちばん深層意識においては生命というものを望んでいる。ここで地震が起きれば、みんな

「危ない！」

と言って外へ出るわけです。

「死んでもいい」

なんて誰も思わない。それならば、どんな相対的な現実が来ても、キリストは、

「我を信ずる者は死ぬとも生きん」

という、

「死んでも死なないんだ」

というようなことをヨハネ伝で言っておられますが。それは本当の生命を受けなければ、その実感は無いわけです。信仰の世界では、そういった

「信は即ち現^{うつ}である」

と私は言ってますけれども、「信ずる」なんていうことは実は、本当の現実をつかんでいなければ、「信ずる」なんていったって、それは空念仏だ。

「我を生かす」ということは、

「汝の生を生とする」

ということです。

「あなたの生命を生命とし、あなたの生命に生きている」



ということ、ただ相対的な

「自分が生きている」

なんてなことではない。

「あなたの生命が私の中で生命いのちしています。だから、死に勝ち冥府に勝っている」

と。神さまは永遠の存在です。ですから、

「ヤーヴェーよ」「神よ」「キリストよ」

とか、叫ぶことそれ自体が

「直ちに神の、キリストの中に入る」

という角度に祈りがなつてこない、祈りは空転してしまう。

「即の現実」

です。もう私はだんだんしゃべるのが面倒臭くなってきましたね。そういう「即」の現実です。

●聖者と罪びとの二重構造

4 ヤーヴェーを奏かなで謳うたえよ、その聖徒らよ！

その聖潔きよさを憶えて感謝せよ！

この

「聖」(カードーシュ)

という字は、旧約のいちばん大事な字の一つです。神聖とか、神を聖者とかいう。「カードーシュ」とか「コーデーシュ」とか、いろいろ言います。

「聖」というと、人間は「汚れ」であるという。神さまの造ったものはみんな本当は聖なんです。我々の全存在は神の似姿なんです。いわゆる肉体が何かであったり、魂が何かであったり、そういう分け方は本当はない。だから、神さまが造った我々の身心しんしんというのは、これは本来、聖なるもの。だから、永遠に生くるものです。

だが、心が病んだために、即ち神さまとの交わりを自分の方で切ってしまったために、上を見ないで横をみたり、自分を見ている。それだから、

「心が病んだから、身体も病んできた。その先は死である」

と、こういうことです。本当は身心全部、聖ですから、これは生きるんです、永遠に。それを実証したのがキリストなんです。

だから、キリストという証者は――自分ばかりとり澄ましているのでも何でもない――そういう身心の非常に本当の豊かな世界です。神的に豊かな、それ自身は歓喜そのものの、喜びそのものの世界なんです。

「聖」というと何か少し冷たいような感じを受けるが、それは間違いだ。そういった盛んなる豊かな光り輝いた――聖なる光といつてもいい――そういった現実がむしろ「聖」と



という言葉において、「光」とか「愛」とかいう概念をその中に含んでいるということをもつと強く自覚しなくてははいかん。聖者は人を審くのではなくて人を救う。

「いと高き者、いと聖なる者は降くだつてきて、心碎けたる者、魂のくずおれたる者の中にきて、これを生かす」

と書いてある。ですから、そのような意味において、

「聖者は救わんとするひと」

なんです。聖なる神は救う意志を持っている。即ち、人間を本当に神と同質のものに回復させようとしている。

「聖徒ら」というのは、そのような神を受けとろうとしている者。我々は聖ではないんだから、「罪びと」なんだから、死に至るまで。ダメなんだ、破れ器だ。破れ器だけれども、破れ器の中に聖なる全き者を受けとる。

そこが現実の救いの姿ですから。「聖者」というのは、その聖を信じ受けとつている者が聖者で、それ自身が手放しに聖きよき徒であるということではない。ところが、そのところ
はカトリックはちよつと困るんだよ、

「彼を聖者に列せさせる」

とか、

「アウグスティヌスは聖者である」

とかいう。何か他の人と違ったような人間だと思っている。そういうように聖者というものをとり扱うのはいかん。どのクリスチャンもその救いを約束されて、キリストの救いにとつてゐる者は、みんなこれは聖者なんです。現実には罪びとであるという二重構造になつてゐる。

「義人にして罪びとである」

とルターが言いましたが、それと同じことです。

私が言っているとおり、「三日月」なんだ。これは救われている現実だけれども、これが「満月になることを約束されている存在」

三日月は、聖なるものがここに来ている。しかしながら、三日月であるかぎり欠けているから、これは罪びとの姿なんだ。けれども、これはちゃんと満月になることを約束されている。この光がそのことを証しているわけです。

●神の怒りと恵み

5 それ聖怒りは束の間にして聖恵みは生涯〔に亘り〕、
 ゆうべ なみだ
 夕に泣涕きたり宿るとも晨には歡呼〔来らん〕！

直訳はそうです。怒りは束の間であると。ここに「怒り」と「恵み」ということが出てくる。この節は大事な節です。「神の怒り」という言葉はパウロも使っている。ローマ書2章5節に、



「なんじ頑固^{かたくな}と悔改^{くいあらた}めぬ心により己のために神の怒りを積み、その正しき審判^{さばき}の顕^{あらわ}るる怒りの日に及ぶなり」(ロマ2・5)

と恐ろしいことが書いてある。「神の怒り」ということと、「神の審判」ということは、同じことを別の言葉でいつているだけのはなし。「審判^{さばき}」はその前にも出てます、

「斯^かる事をおこなう者を審^みきて自己^{みずから}これを行う人よ、なんじ神の審判^{さばき}を遁^{のが}れんと思うか」(ロマ2・3)

これはユダヤ人に向かって言っている。神の怒り、審き。それは何がもうひとつ奥にあるかというと、義というやつがある。「神の義」です。マルチン・ルターが苦しんだのは、神の義というのはただ怒りと審きにばかりかかっているかと思つて、それで苦しんだ。人間が間違つたことをしたり、神さまに背いたりすれば、神さまは怒る。そして審き給う。それが神の義であると。まあそういうところもありますよ。「罪」というのは、神さまと我々との縦の関係が切れてしまうのが罪だから。人間の側から切つてしまった。横を見ている。この縦の関係にはつきりと自分を置いて、そして、その関係の実質は何かというと、実質は神に従うことです。

「十字架の死に至るまで従い給えり」

と、キリストは神さまの意志に従っている。だから、神の聖なる意志を全存在で現象する、

「聖意体现」

という言葉を私は言うけれども、聖意体现ということを実行したのはキリストだけ。ということは、自分の意志を捨てているわけです。

「汝の意志を成させ給え。どうぞ私をお使いください」

と。全的に提身している。神に対する全的奉仕です、普通の言葉でいうと。提身の姿が義である。神さまの御旨^{みむね}に従っている事態が義である。それがはずれるから、神さまは人間との間をしっかりと立てようとしている。この義をはずしてしまつて、偶像を拝んだりしているから、また自分自身を何者かと思つているから、そこで神の怒りがやってくる。審判が、審きがくる。

「ダメだ、戻れ、帰れ」

ということ。す。なかなかこれができない。ルターは一生懸命でこれをやろうとするけれども、また従っていると思うけれども、本当に心から従っていない。

「怒りが恐いから従っている。そういうのは本当に神さまに信頼していることではない。神の義がどうしても自分を審く」

といつて苦しんだ。ところが、この事態を完全に全うしたひとがキリストであるから、

「神の義は福音のうちに現れた」

と。キリストのよろこばしき音ずれとは何かと思つたら、人間が自分でできないから、キリスト自身が、



「この事態をお前たちに無条件にやるぞ」と。

「神の義はキリストという喜びの音ずれの実体において現れた」

ということ。だから、「キリストを受けとる」ことが「神の義を受けとる」ことで、この義は審くばかりでなくて、「与える義」であつたと。

「神の義はキリストを通して与えられるものであつた」

ということに気がついて、そこで、

「神の義は福音のうちに現れた」

というパウロの言葉が、今度はルターには救いとなつた。そこに宗教改革が始まつたわけです。ですから、

「神の怒りは束の間にして恵みは生涯に」

という。神の怒りは即ち義において――神さまは、義でないもの、不義なるもの、神との関係のダメなやつ、それに対しては

「ダメだ!」

と言つて警告を発し給うのだから――この怒りという神の警告は、恵みの別な姿なんです。だから、ルターも

「怒りは異なる恵みである」

というようなことを言っている。神は怒ることによつて恵むんです。審くことによつて赦すんです、審きをとおして。それが十字架なんです。

●十字架と聖霊

神さまは私たちの在り方を直接にご覧になつたら、私たちは神の審き、怒りに遭つて、滅びなければならぬ。死と滅びにされても、こつちは文句がないわけです。けれども、神さまは、殺そう、滅ぼそうとはしていらつしやらない。何とかして人間を救いたい。その救う道を神さまはキリストを通して現した。即ち、

「その審きを、罪をぜんぶ私（キリスト）が引き受けた」

というのが十字架なんですから。

「お前さんたちのその罪を、神さまに対して義を全うすることのできない、しょうがないものをぜんぶ私が引き受けた。もう無条件に」

と。だから、死罪を我々に代わつて受けとつたという、

「代罰」

というような言い方をするのはそこなんです。十字架は代罰ばかりではありませんけれども。即ち要するに、

「罪の価は死である」



が、そいつを全部引き受けてしまつて、そして無条件に赦した。この十字架の罪の贖いということ。罪を全部贖いとしてしまつた。ルターが言っている、

「我々のマイナスを全部引き受けて、プラスをくれた」

というのがキリストの十字架です。これはプラスの形（＋）だもの。十字架はプラスの形。プラスだと思わなくては。このプラスを、罪の贖いを無条件にくださる。

「こちら側がどうである、こうである」

なんて、もはや問題でない。

これを無条件に、どうして受けとらないんですか。これが恵みなんです。恵みの一面なんです。まだこればかりではない。神さまの恵みはもつと凄いんだから。

即ち、罪のゆるしが恵みの根底です。罪の贖いが恵みの根底。そして、現実の我々は破れのそのままでありながら、もはや罪からは解放されて、すっかり赦されている。無条件にゆるされている。

「無条件」

というのは、十字架という絶対的なものを通して無条件にです。

仏教の大慈大悲は十字架が無い。憐れみ、慈悲そのものです。けれども、福音の世界では、どうしても罪に対する、そういった審きというものを通らなければならない。審きは、私たちが審かれたのではない。キリストが審きを受けてしまつた。キリストは、

「彼らの罪を見ないでください。私を見てください」

と神さまに言っているわけだ。だから、十字架上のキリストが、

「彼らはなすところを知らず、彼らを赦せ」

と十字架上でキリストが叫んでいる。空手形で叫んでいるではないですよ、キリストは。十字架という自分の身を捨てて、その場において「赦せ」と叫んでいる。これが

「絶対恩寵」

です。それを冥想してください。もうぶつ倒れるから。それを本当に全存在で受けとつたら、全身が涙になる。そこを通らなかつたらダメです。

そこを通ると本当に今度は「聖霊」がくる。これが恵みの積極面です。恵みの根底は「十字架」の罪の赦し。恵みの積極面といいますか、前面には今度は、聖霊がやってくる。神の霊が、キリストの霊が。聖霊は愛の霊である。十字架はもちろん愛ですよ。この愛の霊は、生命、光、何と言つてもいい。義でもあるし、愛でもあるし、もう一切のものが含まれているところの聖霊です。

「主は即ち霊なり」

と。この「霊」はそういう霊のこと。心靈の霊ではない。だから、恵みというのは赦しばかりではない。赦しのあとに聖霊がくる。その全体を渾然的こんぜんに言えば、「救い」という。



●人を荷なう力は聖霊

今朝、私は第3チャンネル（NHK教育テレビ）をちよつと聞いていたら、ICU（国際キリスト教大学）総長の岩佐八郎という人が或る大学の学長と対話しているところがあった。「宗教を生活する」という題でした。私はじつと聞いていた。そうしたら、岩佐さんがこういうことを言っていた。あの人は本当にそういうように生きている人ですね。

「生きることは愛すること。愛することは理解すること。」

相手を理解すること、相手をよくわかってやること、

理解することは赦すこと。

その相手の立場を赦す。

赦すことは赦されること。赦されることは救われること」

と。なかなか体験からものを言っていますから、その通りです。

「我々の隣人をゆるした如く、私たちをゆるしてください」

とは主の祈りでしょ。人をゆるさないで神さまに祈ったって、これはダメです。我々は実は根底においてゆるされている。キリストに罪を赦されているから、それで人を審いたりしているうちはダメなんだ。

「赦すことは赦されること」。実は赦されているから、本当にゆるすことができるので、本当にゆるされているというこの絶対の次元を受けとっていないと、人を赦すことができない。一時的には赦したようなことがあっても、また癪にさわったりする。本当にゆるすというのは、今度は私に言わせると、相手を荷なうことになる。

「赦されることは救われること」。キリストに赦されているから、人を赦すことができるし、また赦すばかりでなく、人を荷なうこともできる。相手はいつまでも逆らっているかもしれないよ。けれども、ただそれを外側から「よしよし」なんて言うのではない。それに對してはもちろん執り成しの祈りが必要です。執り成しの祈りと、あとはだまって荷なっていること。その黙って荷なっている姿は、聖霊が来なければできない。本当の力が来ていないと。やせがまんでできるものではない。

「恩恵」というのは、もう何回私たちはこれを言い、また聞き、また考えても、これで足りるということがない。限りなくその世界に入っていく。だから、み怒りは、神さまは別にいつまでも怒っていいよというのではない。警告を発しているんです、神さまが怒るというのは。救わんとして警告を発しているのがこの神の怒りです。

●無者即無限無量者

我々は間違つたら、「私はわるかった」と、キリストの十字架の前に平伏して、そして進んで行けばいい。それだから、

「それ聖怒りは束の間にして聖恵みは生涯と共に長い」



と。いや「生涯と共に」でなくて、もう永遠に向かつて恵みは進んでいく。この赦しに在って、もはや私たちは死んでも死なないところにきている。聖霊の生命が、永遠の生命が来ているから、キリストと共にもう死と罪と冥府とサタンに打ち勝っている。

人間ですから、相対的現実というのは、躓いたり、転んだりしますよ。けれども、絶対にそれでへこたれない。常に新たに前進する。だから、

「罪の増すところに恩恵はいや増す」

なんて、へたすると躓きの言葉をパウロは言ってますが、そういうことです。だから、

「夕に泣きたり宿るとも」

と。「どうもすみません」と。また他のいろんな――何もそういったことばかりでなくて――人生にはいろんな悲しみがきます。悲しみ、涙、憂い。

「けれども、晨には歓呼うたわん」

と。喜びとなり、歓喜となる。だから、この恩恵の世界は、これは歓喜の世界、喜びの世界です。そして、自分だけ喜んでいるのではなくて、人に喜びを分かたんとする。人に喜びを分け与えようとしてやまない。泉は流れてやまないのと同じことです。

第5節はそういうわけです。

「聖怒りは束の間にして」

と。しかし、神さまの厳かな面をいい加減にしているのはダメです。これは畏れかしこむ。恐がるのではない。畏れなんて言わなくても、もうぶつつぶれた姿、平伏します。平伏するという姿には必ず恵みがきている。そしてここに本当の権威がある。何者も侵すことのできない権威がくる。どん底に立つと、逆に本当の権威が出てくる。人間的な誇りとは違います。

ところが、そのあとに書いてある。

6 然るに我れは言えりわが安泰けかりしとき、

我はいつまでも動かされじと。

7 ヤーヴェー、汝聖恵みをもて我山に力を立たせ給いしが、

汝が聖顔を隠し給えば、我は戦き惑いて在りき。

「我は言えり、わが安泰であつたとき、もう私は不動だ」

と思ったと。そういう自分の側を何かとしていると、とんでもない傲慢になって、

「神さまは隠れてしまった。そして、こっちは戦きあわてた」

なんて書いてある。御霊の世界は、もし

「私は大丈夫だ」

なんて思ったり、

「私はだいたい信仰が強くなった」

と思ったり、



「御霊が来ているから」

なんて言つて、いい気になつたりしたら、今度は逆にみんなサタンの手下になつてしまう。霊的傲慢というのはサタンですから。サタンは霊的傲慢なやつです。キリストはあれだけ素晴らしいひとだけれども、自分を素晴らしいなんてひとつも思つてやしない。

「私は何もできない」

と。「善き先生」と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまのほかに善いものがあるか」

と言う。キリストはいつも神の前に自分を平伏して、何者とも思つていないから、私はキリストのことを

「無者」

と申し上げている。まだ誰も言わないんだよ、そんなことを。あの本（『無者キリスト』）が出たら、相当ちよつとあちらこちらから驚かされている。

無者となつたから、神さまの無限無量がやつてきたという。無限無量者である。こんなうれしいことはないじゃないですか。「何かとなれ」というのでなくて、

「何ものでもないことを悟れ」

と。無一物無尽蔵という。無限無量を、我々もそういう質をいただく。キリストという無者をいただく、彼は無限無量だから、私たちの中にそれが入ってくる。だから心が驕つたらダメになることは自分でもわかります。ところが、

「もう何者でもない」

という自覚に――奥の無自覚的自覚といつてもいいくらいの――そうなつてくると本当に楽なんです。

●人間の最大の関心事は宗教

フリードリッヒ大王が、

「私は国家の第一の僕である」

と言つた。さすがにフレデリック大王です。王様が自分は国の僕であるという自覚にある。散歩して――誰も護衛なんかついてない――単独で散歩して、民の直訴を受けていた。「フリッツのおじちゃん」といつて親しまれた。ボデイガードが付いてどうのこうのなんていうのは本当の世界ではない。本当の世界はそれ自身が、何と言つても深い愛です。

明治天皇にはそういうところがあつたね。特殊部落のひとたちを、

「彼らもわが赤子^{せきし}である。そんな区別をしてはいかん」

と言われた。何といつても、今はこの霊的人格の飢饉です、もう日本はどの方面においても。特に政治家にそういった大人物が出て欲しいんだが。そのもとは何かというと、問題はこころの問題です。結局、宗教の問題になる。



私は今度は『芸術のたましい』（著作集第二巻）を書いたけれども、ただ芸術ばかりではない。これは――自分で言ったらおかしいけれども――私が今まで書いた最大の傑作のひとつです。ぜひ読んでもらいたい。

人間の最大の関心事は――「宗教」という言葉は嫌いだけれども――この宗教です。これをみんな、

「これだけはご免である」

と敬遠している。本当に敬してはいない、何とかして遠ざけている。ダメですよ、これが文化文明の根底であるというのに。東大を辞める時にそのことを私は講演して退職した。

「小池さんからああいう話はもつと前から聞いておきたかった」

なんてね（笑）。もう白鳥の声だから。辞める時だから言っちゃった。

●肉体が霊体に化する

「^み聖怒りは^{つか}束の間にして^み聖恵みは^{いのち}生涯と共に長い」

と。涙を通してこの恵みの世界を見ると、虹のようです。神さまの太陽の光が露にあたりと虹になる。虹は雨のあとに出るでしょ、雨後の虹という。キリストは虹のような存在です。そのことも今度は書いてある。

⁸ 汝やーヴェーを我は呼ぶなり、

わが主にぞ我は切に願うなり。

⁹ われ墓穴に降りなば、わが血に何の益あらん！

塵は汝に感謝を致し汝の^{まこと}信実を述べつたえんや！

なぜ「血」と言うかという、ユダヤ人は、創世記9章にも書いてありますが、

「血は即ち生命のあるところ。だから、血を流してはいかん」

という。血を流すことは生命を取ることになる。戦争、殺戮は、人殺しはいちばん悪いです。人殺しは何といつても桁違いに悪い。

キリストは、その血を流して罪の贖いをした。けれども、贖いの大業を終えたキリストはそのままではいけません。甦つて、霊体を着て現れた。「甦った」といつても、もとの肉体ではないですよ、肉体が霊体に化するんです。霊化してしまう。自在な世界ですから。これはとても桁の違った次元です。

まあそれくらいイエスというひとは神さまと本当に一つだったんだね。一如です。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。

「自分は何でもない。なぜ、私を善いと言うのか」

なんて言ったキリストが、

「私を見た者は、父を、神さまを見たのだ」



と言えるということは、完全に神が自分において現れて、自分はゼロなんだから、
「0＝∞」（ゼロ・イコール・無限大）である。

「われというゼロを見た者は、無限大なる神を見たのである」
ということになる。だから、「キリストに祈る」というのは、

「キリストの中に自分を入れて、キリストと一つになる」

ということ。これは十字架の贖いを通しているから、赦されているから、だから、聖霊が来るんです。一つになる……（異言）……。そういう世界ですから。もういわゆる思われて
いる世界ではないですよ、これほど素晴らしい現実はないですから。

● 神の根源語

10 ヤーヴェーよ、聴きあげ給え、我を憐み給えかし。

ヤーヴェーよ、我に助けとなり給え。

いいですか、こういう旧約の祈りは全部、現在完了で読んでいかなければダメですよ。

「あなたは聴き上げて、憐れんでくださった。助けとなつてくださった」

と。そういうように、「給え」という祈りが現在完了の響きでもって受けとつていなければ、
新約の祈りはそうなる。もう言葉の奥をグツと自分でつかんでいかなければダメですよ、
言葉にとらわれていたら。

「聖書の言葉にも囚われるな」

と私が言うのは、聖書の言葉はもつと奥から叫んでいるので、ギリシア語でも、ヘブライ
語でも、日本語でもない。神の根源語なんだ。

まあそんなことを言うひとはあまりいないけれども、しょうがないね、これ。本当にそ
うなんだから。けれども、若い人は、ギリシア語やヘブライ語を勉強してくださいよ。た
だし、文法的にやつたつてダメです。その奥を読む。

「ギリシア語やヘブライ語ができるほうがより聖書がわかる」

なんて、冗談言うなと私は言う。

「それでは、勉強しないでいいか」

と。そうも言わないけれどもね（笑）。勉強したい人はやつてください。

「そんなギリシア語やヘブライ語なんてご免です」

という人は、いいよそれで。この日本語の聖書の奥に神の根源語というのがある。霊言が、
根源の言葉がある。ちょうど音楽と同じだ。万国語に通ずるんだ、根源語というの。響
きなんです。響きの世界を受けとれということ。

そういう意味において、一番素晴らしいのはやはり音楽の世界です。響きの世界。言葉
がもう響きになる。意味ではない。絵は音を発しないけれども、これもまたあるひとつの



瞬間をつかまえて、瞬間において劇的なものを表すような絵ですね。その奥に、あるいはその描かれざる空間に、何か生み出していくような、そういう絵でなければね。宮本武蔵の絵なんかはやはりそういうところがあるよな。まあ今度の『芸術のたましい』を読んでくださると、皆さんが共感なさると思います。

●愛とは人を荷なうこと

11 汝はわが哀願なげきをばわがために踊躍おどろにうち変え、

わが麁布あらたえを解きて歡喜よろこびを我に帯びし給えり。

12 それ故に榮えは汝を謳うたいて黙もだすことなからん。

ヤーヴェーわが神よ、いつまでも我は汝に感謝せん。

「歡喜よろこびを帯する」という言い方をしている。「麁布あらたえ」というのは喪服のこと。それからい

んな災害がきた時や悔改めて祈ったりする時に、この麁布を着る。麻布の粗衣です。そういう麻布の粗衣ではなくして、歡喜を私に帯にしてください。わが帯は歡喜であると。

「愛を帯とせよ」

という言葉が新約にあるね。歡喜と愛。神さまの愛。神さまに愛される喜び。

「われ汝を悦ぶ、汝を愛いづくしむ」

とキリストに向かつて神さまは、あの洗礼の時にヨルダンでもってキリストに言葉がきたでしょ。それから変貌の山でも。

神さまの「愛」というのは、「救う」ということですよ、「救い」と同じことです。かわいがるということではない。救うこと。「人を愛する」とは、

「人を助けること、救うこと、荷なうこと」

です。それが愛するということ。人間だから、いろいろな感情は働くでしょう。けれども、その奥の内容は魂の救いのことです。

愛というものはいろんな姿に現れる。恋愛にも現れます。ところが、

「恋愛は間違っていて、神の愛はいい。アガペーが善くて、エロースが悪い」

なんて、切ってしまう人があるよね。そんなものじゃないですよ。神さまの愛はいろんな、千変万化して現れる。

私の藤井武先生は、「恋愛否定論」を書いたけれども、あれはちよつといきすぎた。

「藤井先生は、奥さんが素晴らしかったから他の恋愛がいらなかった」

と、そういうことではないけれども（笑）。とにかく、愛というのはいろんな角度をもっている。そのことを深く捉まえていたのはゲーテでしょうね。神さまの愛は友情関係にも、男女関係にも、親子関係にも、また敵と味方の関係にも、いろいろな姿で現れる。私はそう思っています。

「敵を愛せよ」



というのは、敵を本当に荷なうこと。いちばんの内容からいうと結局、救いなんです、みんな。ただしもちろん、愛の衝動が内容的に間違った方にいけば、それはダメですよ。救いなら間違いっこない。相手を荷なったり救う。だから、「敵を愛せよ」というのは「敵をも荷なつてやれ」ということ。

「汝らを責むる者のために祈れ」

とパウロが言った。

「はい、祈れます。可哀相だ、あの人たちは、分かっていないから」

と。だから祈ってやる。さっきの岩佐さんは本当に素晴らしい人ですよ。

「いろんなやつが学校にはいる。学校を破壊しようと思っているやつもいる。けれども、それをも私は、出て行けなんて言わない」

と言って、その相手を本当に包んでいるようなところがある。柳宗悦という方の影響を受けているね、やはりこの岩佐さんは。柳宗悦という人の全集を私は持っているけれども、これは本当に読む価値がありますよ。

そういう救いの助けの愛。神さまにそういうように救い助けられたから、うれしくつてしょうがない。この喜びを人に与えざるを得ない。だから、キリストはこれを喜びの音ずれ、福音という。

「福音」「福音さいわい おんしんの音信」

というのは、本当は

「喜き音いん」

でもいいんだよ。喜音でも、

「楽らく音いん」

でも。喜び楽しむ。楽音は音楽の反対だ（笑）。そういう楽しいんです。

だから、

「キリスト教」

ではない。私は

「キリスト道」

なんて言っているけれども。そういう喜びの音信。この福音を受けとつて、くすぶっているような顔してるのはダメです。

「どんなことに出つくわしても、絶対にそれで行き詰まらない。もうひとつ違った次元にいますよ」

というわけだ。相対的な次元にいるから、すったもんだ、「なんだかんだ」と言つて、一喜一憂するけれども、そんな一喜一憂ではないですよ。常にほほえんでいるような人。どんな苦しみに遭つても、これは本当の底力があると、そういうことになります。



特に恵みのところではローマ書5章をよく読んでください。

● 祈り

聖なるおん神さま。主イエス・キリストさま。私たちのために十字架にかかり、完全に過去も現在も未来も贖いとおつてください、永遠の今を聖霊のご恩寵をもって、いついずこにおきましても直ちに「汝と共に」の世界に入れてください、「汝の中に」入れてください、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

とパウロが繰り返して言っておりますが、そのような事態を福音の歓びとして受けとらしめられ、聖名を讃え奉ります。

詩篇30篇がその方向を指している詩篇であることを、また新しく受けとり、30篇の作者と共に、

「み怒りは束の間にして、み恵みはとこしえである。夕には涙を流しても、朝

には歓び歌わん」

と、まことにそのような人生であります。

どうぞ、ここにある兄弟姉妹たち、いろいろな悩みや、悲しみや、問題や、さまざまの現実にあるかと思いますが、しかし、そのような波風のある相対的現実を突き抜けて、あなたと共にあり、あなたが内にいたもうところのこの現実が、何事もこれを覆すことができません。まことの平安が私たちの中にあるがゆえに、感謝であります。

ああ、主イエス・キリストを一切とすることの何たる幸いであるか。ただ聖名を讃え奉ります。どうぞ、この歓びを、この力を、この光を、この愛を、いかにもして悩める者、苦しめる者、行き詰まっている人たちに、分かち与えることができますように、いよいよお使いくださらんことを切に願ひ奉ります。

奥田君の集会、また今橋君の集会、その他諸所方々の集会に、どうぞ、また今日もかけがえない一日として、あなたのご恩寵の御言がくんだり、いよいよ希望より希望へ、力より力へと歩ませしめたまわんことを願ひ奉ります。

心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名により献げ奉る。アーメン。

